

# 人と地域を結ぶ絆

「あら盲導犬だわ」。そんな一言が縁となり、つなぐ手は網の目に。社会に溶け込んだ実感。



## 盲導犬と共生する

赤塚セツさん(72) / 新潟県 / 盲

ウツズ (LR ♂) ← ユニ (LR ♂) ← シエラ (LR ♀) ← プレス (LR ♀)

盲導犬歴27年の赤塚さんにとって、その大半は「にいがた・盲導犬ハーネスの会」の歴史と重なる。

中学生の頃から視野が狭くなりはじめ、卒業後就職先の主人に勧められて行った病院で網膜色素変性症と診断され、「いずれ失明します」と母を通じて告げられた。19歳だったが、まだ見えているし、心の準備は出来ておりさして不安は感じなかった。その後盲学校に進み、マッサージ師の資格を取って卒業し治療院に就職。25歳でマッサージ師同士の結婚。二人の娘に恵まれ、外出のときは母や姉、娘たちに手引きをしてもらった。白杖を持って歩くのは恥ずかしくて使わなかった。

### ヨーロッパ旅行でショック

初めての盲導犬ルルに出会ったのは45歳。視力を完全に失い、直後に母を亡くして、「一人で歩けなければ……」と気づき、貸与を申し込んだ。5年後の1995年、ルルと一緒に参加した

障害者向けのヨーロッパ団体旅行で「カルチャーショック」を受ける。盲導犬がレストランやホテル、乗り物にも自由に出入りできるばかりか、水遊びが好きなルルが運河に飛び込んでもとがめる人はいない。視覚障害者が彫刻作品に触れられる美術館もある。「日本もこんな社会になって欲しい」——願望が確信となった。

帰国するとすぐ準備を始め、1997年12月には「盲導犬ハーネスの会」を立ち上げた。2年目からは会長も引き受け、盲導犬の役割を社会に啓発する活動の先頭に立っている。手分けして新潟市内の飲食店やホテル

に出向き、『盲導犬可』のステッカーを貼ってもらえるよう頼み込むことから始めた活動も、県内では着実に根付いてきた。

今では小中学校を中心に講演依頼も年間30校以上にのぼる。外出先で上手に介添えてくれた施設の案内係の女性は「学校で赤塚さんの授業を受けたことがあるから」と教えてくれた。日本盲導犬協会と共催で始めた街頭募金でも、自分の財布からお金を出して募金してくれる小学生に感動させられる。街頭募金は土・日で70万円の実績もある。盲導犬育成機関への寄付、募金に参加してくれた盲導犬や、獣医師会の協力でも引き取られ



▲ファッションショー出演はウツズとおそろいの衣装で

## 社会をめざして～赤服コンビが県内行脚

た引退犬へのお見舞いなどにも使われている。

「盲導犬のためならなんでも……」の赤塚さんは歌手の肩書も持つ。歌が好きで、勤務先の治療院が視覚障害者のために開いた歌謡学院を指導員1期生として手伝っているうちに、作曲家服部良一氏から贈られた「朱鷺の詩」で歌手デビューした。42歳だった。芸名も新潟にちなんで川森ゆかり。各地の盲導犬チャリティーコンサートなどに出演し、啓発に努めている。71歳の今年はファッションショーの舞台にも立った。「こういう話があったとき、自分から引いたら人生なにも実現しないでしょ。チャンスは逃げていくだけよ」と。

「にいがた・盲導犬ハーネスの会」は2017年4月現在、会員86人。うち盲導犬ユーザーは26人、あとは晴眼者でボランティアに出てくれる人たち。「こんないろいろなことが出来るのも盲導犬のおかげ、それもボランティアさんがいるからやれること」と赤塚さんは言う。

### 聴覚障害夫妻と楽しい歩き

2010年のこと、それまで一度も訪れず啓発活動の空白地になっていた佐渡島の一周旅行を思いついた。ボランティアのIさんが車での同行を快諾してくれた。1月から毎月、Iさんと一緒に佐渡市の障害福祉課を訪れ、学校訪問と現地ボランティアの募集への協力を申し込み、5月14日から1週間で7校訪問(うち1回は小中合同)の計画が実現した。出発前夜に佐渡の担当者から電話があり、「1日目予定の宿が今回は見合わせてほしいと言っている」と連絡があった。当時、島内に盲導犬が1頭もいなかった佐渡では受け入れ拒否くらいで驚いてはられない。2日目予定の宿に電話して前日からの連泊をOKしてもらい、4頭目の盲導犬プレスと共に連絡船ジェットフォイルに乗り込んだ。

「5月の佐渡は新緑とウグイスとカエルの声と一緒に聞けるのよ!」。プレスに導かれ急な石段を下りて日本海の冷たい水に手を突っこんでみたり、散歩中の9歳のおばあさんと話したり、いつの旅でも楽しむことを忘れない赤塚さん。——そして最終日には楽しいハプニングが。

この日の道案内は聴覚障害のご夫婦だという。先行しているIさんから心配する電話がはいった。「むこうは見えるんだし、私は聞こえるから、なんとかなるだろう」と会った。若いご夫婦で、「自分たちも障害者だけど、自分たち出来ることで人の役に立ちたくてボランティアに応募した」という。奥さんは相手の唇の動きをみて言葉は理解できる。ご主人は少し難聴で、歩いているあいだ中、うしろから来る車を気にして振り返っていた。



▲佐渡一周では1週間に6回の学校訪問  
▶道案内ボランティアの聴覚障害夫妻との楽しい歩きも



「ウグイスが鳴いてるよ、木の上の方」「どこ、どこ? わからない」「じゃあ、今度鳴いたら教えてあげる」「白かわいい花が咲いてる」と手を添えてさわらせてくれる。ノギクのような小さな花だった。障害のある者同士、気どりの遠慮もない楽しい時間だった。「聴導犬は使わないの?」と聞くと、手続きがわからないという。新潟に帰って日本聴導犬協会に連絡したら、すぐに訓練が始まり、10月には「聴導犬の認定を受けました」のメール。今では、佐渡に盲導犬は1頭だけ聴導犬は4頭になったという。

こんなベテランユーザーの赤塚さんだが、ほろ苦い思い出もある。その名は6頭目のユニ。面長で足も長く美男子なだけけど、頭が良くて? 良すぎて? とにかく言うことをきかない。バカにされてるようで怒ると「フン!」とそっぽを向く。ついには臭いづけするようになった。こうなると盲導犬としては使えない。3年で交替させてもらった。——ところが、ところがである。

引退して引き取られた先を聞き訪ねてみると、ユニは優秀な「介助犬」に変身していた。床に落とした物は拾って渡す、女主人が立ち上がろうとすると、「ぼくの背中につかまって」とそばに寄って背中を上げる。——なんと新しいご主人はつけ教室を開く先生でした。

「結局、私がアイコンタクトをとれなかったんだねえ」と反省口調の赤塚さん。全盲のユーザーと盲導犬がどうやってアイコンタクトをとるのか、それはもう「ふたりだけのヒミツ」というものなのだろう。(取材)

## 出かけるたびに道に迷う「母さん」を支えます！

石川登志子さん(67) /新潟県 / 盲

ウェナ (LR ♀) ←ガーデン (LR ♀)

私はウェナ、黒ラブの女の子です。2012年11月、共同訓練を終えて新潟に来た時、「ガーデン」と刺繻してある布団を示されて「ここがあなたの場所よ」と言われ、「あら、これは私の名前じゃないわ」と不満でした。後で分かりましたが、ガーデンは1頭目の盲導犬で、パートナーになって1年ほどで病気がかかってしまい、富士ハーネスで治療することになってお別れしたんだって。母さんはこんなに悲しい気持ちになるのはもう嫌だから、二度と盲導犬は持つまいとその時は思ったのに、ガーデンのぬくもりや歩くスピード感がどうしても忘れられなくて、私が来たというわけ。

盲導犬を持つ前は、視覚障害を周りに気付かれるのが怖くて白

杖も使えなかった。でも、人の目を気にしている自分がどんどん嫌いになって来て、盲導犬と歩こうと決心したんだって。

母さんは出かけるたびに道に迷います。まだまだ失敗はあるけれど「そのうちになんとかなる」と、母さんはいたって呑気。



やれやれ、手のかかる人とパートナーになってしまったけれど、母さんの笑顔が好きだから、ハッピーリタイアを迎える日までもう一頑張りしようと思うウェナなのでした。

◀「新潟市障害福祉啓発事業障害福祉フェスタ2016」ファッションショーに出演した時の衣装で

## 盲導犬は、私の世界を広げ、心を豊かにしてくれるパートナー

椎カヨ子さん(70) /新潟県 / 盲

ターニャ (LR ♀)

「盲導犬 やっぱり手にして 良かったと 風の匂いを ともにククン」

このような思いが私の口をついて出たのは、パートナーが5歳、一緒に暮らして4年目の穏やかな春の頃でした。

今日も携帯を持つ私を見て、元気よく玄関に出るパートナー。ハーネスをつけながら「今日は喫茶店よ、がんばろうね」。湊町の交差点をいくつか越え、小学校の児童や保育園児の声にパートナーはさらに大きく尻尾を振ります。湊地区と夷地区をつなぐ両津欄干橋で一息いれます。橋の下は加茂湖にそそぐ海水が流れ、そよ風が潮の香りを運んで、パートナーともどもククン。「さあ、喫茶店に行くよ」。優しいママに迎えられ、

パートナーはご機嫌。静かなひとときを過ごし、次は楽しい地産地消のお店で野菜や総菜を買って帰ります。

そうそう、私のささやかな趣味の俳句のネタ探しにも、毎日の散歩が一役買っています。



「薫風や 盲導犬と立つ ライン」(出発式)  
「春泥や 導く犬の 大まわり」

盲導犬は私にとって大切なパートナーであり、私の世界を広げ、心を豊かにしてくれる。パートナーへ、ありがとう。

◀2014年度(平成26年度)新ユニット出発式にて

## 「目の不自由な人に声をかけたい」～児童の反応に手ごたえ

田名部 功さん(63) /群馬県 / 神

ヘレナ (MX ♀) ←ディル (LR ♂)

盲導犬と歩み始めてから21年が過ぎました。ヘレナは3頭目ですが、上州の空っ風の吹く日も、夏の暑い日も共に力を合わせて、教員として働く盲学校に通勤しました。3年ほど前に34年間務めた盲学校を退職し、自宅で鍼・マッサージ院を開設し第二の人生を歩んでいます。

盲導犬普及の支援になると思い、待合室に日本盲導犬協会の募金箱を設置させていただきました。在勤中は盲導犬の理解と普及につながると考え、盲導犬についての講演依頼があったときは積極的に出かけていました。退職後は、盲導犬を理解してもらいバリアのなくなるような活動をしていきたいと考え、前橋市のボランティアセンターや教育委員会などにお話をしに

行きました。現在も講演の依頼が続き、パートナーのヘレナと小学校などに出かけています。

小学校では、中学3年生の時に視力を失ったことや、白杖歩行で駅のホームから2回落ちたことなどを語ると、子供たちから驚きの反応があり、「目の不自由な人にもっと声をかけたい」という感想も聞かれました。多くの方に出会い盲導犬の存在意義を語り、理解の輪が広がっていけばと願っています。私自身もできうことをこれからも行っていこうと考えています。

▲ヘレナと講演に行くと、小学生は真剣に聞いてくれる

## テレビ番組「セサミストリート」で盲導犬を知って

加藤千恵子さん(69) /新潟県 / 盲

レーヌ (LR ♀) ←エッグ (LR ♂)

私が盲導犬を見たのは、それこそ50年ほど前のことです。当時、NHK教育テレビで放映されていた「セサミストリート」というアメリカの子供向け番組に盲導犬が出ていたのです。道路信号のところで盲導犬を連れた女性が止まっています。そこへ通りかかった少年が「犬をなでてもいい？」と聞いたのです。「この犬は盲導犬で、今はお仕事かなの」といったようなことを言っていたと思います。私は弱視だったので、目の代わりをしてくれるこの犬に深い関心をもちました。それからというもの、なぜか盲導犬が出ている番組や情報が気になって仕方ありませんでした。まだ盲導犬への認知度も低く、入店拒否の話などを聞くと、それだけで心がひるんだものです。

今までに動物を飼ったことがないし、共同訓練に4週間も家を空けなければいけないことも不安材料でした。でも盲導犬の普及啓発も進み、周りでもユーザーが増え、実生活なども見せてもらえるようになりました。どんどん視力が落ち、視覚障害を受け入れる心構えも出来てきて、初めて心の底の自分自身と対面することになりました。いつも出来ないことを目のせいにして、当然のように諦めていた消極的な私でした。

でも8年ほど前のある時、「やるなら今」という声が聞こえたのです。今に至るには幾多の紆余曲折がありましたが、あの

## 白杖歩行はこんなに大変なのか、改めて盲導犬に感謝

浅見 清さん(68) /茨城県 / 神

カール (LR ♀) ←バジル (MX ♂)

私にとって4頭目の盲導犬カールと一緒にあって、ようやく半年が過ぎたところです。「ようやく」と感じるのも、外出してから帰宅するまで何も問題が起きなくなったのは、最近のことだからです。例えば、歩道を歩いているつもりが実は車道の端だったり、道の端に避けてくれている小犬の傍らに寄って行ってしまったり、公園では「あっ、ワンちゃんだ」と言いながら駆けてくる幼児の方に行ってしまう、私が方向を失ってしまうことなどです。でも考えてみれば、これまでの3頭とも最初は皆そうだったかなあと思います。

前の盲導犬が病気で引退後の半年間、白杖歩行での外出は気が重いものでした。目的地近くのバス停へ友人に迎えに来てもらうなど、白杖歩行がこんなに苦労を要するのかと、改めて盲導犬とたくさんのお客様に感謝するばかりです。白杖歩行は苦手でしたから、長年続けていた散




▲公園のベンチでレーヌとちよっとひと休み

歩も中断していました。20年以上前に境界型糖尿病と診断されましたが、ずっと血糖値はいい状態でした。先日、半年ぶりの検査で値が上がっていました。再び盲導犬が来てくれたので、カールと好きなだけ歩いて体調を整えたいと思っています。そして、積極的に外に出て多くの人と会って楽しく過ごしたいと思っています。

◀横浜・山下公園をカールと歩く  
▼盲学校の教諭として授業で話す。傍らにバジルが待機(2009年)



## 市内初の盲導犬、みんなに知ってもらおうと奮闘

菊島 巧さん(50) /山梨県 / 

シルク (MX ♀)

シルクは都留市で初めての盲導犬です。2010年11月に我が家に来てからは、まず市内のたくさんの人にシルクの存在、盲導犬について知ってもらうことから活動を始めました。市の福祉課や社会福祉協議会の協力を得て、市長公室で盲導犬取得の報告、今後の協力をお願いし、市内初の盲導犬を広報に載せてもらいました。また、今は廃校になりましたが、県立桂高校放送部がドキュメンタリー番組「希望の光～シルクと共に」を制作し、住民や在校生、近隣の中学校生徒に巡回上映したり、「盲導犬に触らない、食べ物を与えない」といったポスターを作って配ったりしてくれました。その成果でしょう、シルクが通う動物病院前の交差点に音声信号機が設置されました。

私の住む地域の道路は、歩道がない所やあっても狭い所が多くあります。




盲導犬との歩行がどんなものか、みなさんの目に触れるようにシルクと歩く時間をなるべく多くするなど、自分からも積極的にアピールしました。自宅から動物病院まで初めて徒歩で行った時はとても不安がありましたが、50分かけて何とか到着した時はうれしかったです。今まで白杖では長い距離を歩いたことがなかったのですが、シルクと一緒になら長距離を歩けるという喜びを感じました。日ごろの散歩も1時間から1時間半は歩くようになりました。

シルクとの生活も間もなく8年目。地域の小・中学校、高校から講演依頼もあり、当初に比べて地域での盲導犬への理解が深まってきています。最近は買い物など出先で「おこなワンちゃん」「お仕事中だから触ってはいけないよ」などの声が耳に入り、とてもうれしく思っています。地元ではユーザーは私一人ですが、引き続き盲導犬の活躍を知ってもらう活動を精力的にしていきたいと思えます。

◀和歌山の全国障害者スポーツ大会で、シルクはメダルに誇らしげ

## 空手の形競技でパラリンピックに出場できたらいいな

小暮愛子さん(39) /群馬県 / 

コニー (LR ♀)

今年3月末にデビューした新人ユーザーです。一人で外を歩くことがなかった私は、白杖を使った歩行訓練から始めました。

神奈川センターの共同訓練では、車の音や段差に足がすくみ、まるで「修行」のように思えた時もありました。愚痴と弱音ばかり吐いてしまいましたが、訓練士さんの行き届いた心配りでどうやらユーザーになることができました。

コニーの仕事は「ザ・几帳面」。わずかなカーブもきっちり止まり、一度教えた顔にかかる高さの葉っぱは忘れずに避けてくれます。おかげさまでスーパーや銀行、市役所、カフェ、福祉センターなど、行ける場所は20か所を数えるようになりました。誰にも断らずにトイレに入れたり、帰りの時間を気にせずに動けたりすることがこんなにも快適なのかと、まるでまた目が見えるようになったかのような感動を覚えています。




毎週月曜日に通う英語サークルへも、ガイドヘルパーさんでなくてコニーと行けるようになり、行き帰りに散歩を楽しんでいます。週2日、空手の練習にも行きます。子供が出場する空手大会に行き、それに刺激されて始めた空手ですが、形競技の魅力に引き込まれ、夢は大きくパラリンピック出場を思い描いています。

コニーは我が家の子供たちともすっかり仲良しになって、昨日は警察犬ごっこ、今日は風船パレーボール遊びと元気に走り回っています。とはいえ、盲導犬との生活は一筋縄ではいかないことばかり。家事、育児に犬のケアが加わり、体はボロボロです。それでも、新緑のケヤキ並木の下、コニーと二人で歩く時、「目が見えていた頃、ここまで何かに感動したことがあったらどうか」と胸が震えます。これからが本当の意味でのスタートかと思っています。これまで関わってくださった皆さまへの感謝を胸に頑張っていきたいと思えます。

◀コニーも子供の空手着をまとい、二人で仲良く

## 僕のお仕事～お父さんと公園までの散歩に出かけます

石津峰夫さん(73) /新潟県 / 

ラキ (LR ♂) ←サニー (MX ♂) ←ポパイ (LR ♂)

僕の名前は、ラキです。今日もお父さんと出かけます。家を出て少し行くとバス道路に出ます。角は駐車場です。車が止まっていると、車道を歩かなければなりません。僕はできるだけ左に寄ってお父さんが真ん中へ出ないように注意して歩きます。駐車場を過ぎると歩道です。段差をいくつか越えて、バイパス道路の下をくぐり抜けたところで止まります。ここは車が飛び出してくることがあります。お父さんは、グッドグッドと僕の頭をなでてくれます。

さらに段差をいくつか越えたところで、僕はスピードを落として止まります。ここは道幅が狭く、そのまま歩いていくと、お父さんが電柱にぶつかってしまうからです。その先の交差点

では、段差に足をかけて止まります。お父さんは周囲の音を確認してからゴーと指示を出します。


渡り終えてしばらく行くと、車止めがあります。お父さんは足を何回かぶつけたことがあります。僕がスピードを落として止まると、お父さんは足で車止めを確認してから、ゆっくりと



▲新潟市西浦区の公園でラキとくつろぐ

歩き始めます。それから公園の芝生広場へ。春はお花見、夏はラジオ体操・ゲートボール、秋は紅葉、冬は雪景色と、一年中楽しむ人々が集まる所。僕はこの芝生の上を歩くのが大好き。お父さんも僕の影響で散歩することが増えました。

## 私は盲導犬。名前はガーナ、黒毛の女の子です

小林波留夫さん(60) /山梨県 / 

ガーナ (LR ♀)

眠ることとシャンプーが好き。爪切りと動物病院、それと花火や雷の音は体が震えるほど怖くて大嫌い。私の相棒は山梨県の田舎に住む、髪の毛の薄さを気にしている60歳過ぎのさえないおじなの。

ときどき相棒とお店に出かけるの。私は居酒屋「津軽」が大好き。ハーネスは背負ってなくてもいいし、常連客さんと遊んであげるとみんな喜んでくれるわ。相棒がお酒を飲んでいて気づかない、そんな時はお店のママがワンツーに連れて行ってくれるの。夜遅くなる時は付き合いきれないので、丸まって寝てしまうわ。夜更かしは美容に悪いものね。

歩いて25分のところにある理髪店にもよく行くわ。到着後

は日当たりの良い場所で一眠り。タオルで肩と首筋を払うパパパタの音で散髪終了よ。よく行く病院の主治医の先生は、若くて綺麗な女性医師。初対面の時、挨拶代わりに足のにおいを嗅いだらびっくりして怖がったけど、今は平気みたい。美しさで




は私の方がまさっているけどね。あっ、相棒の診察に影響するといけなから、このことは他言しちや駄目よ。

あと数年、相棒の世話をして退職したら、静岡県でのんびり暮らすつもり。それまでは、さあ、お仕事、お仕事。

◀バビーさんがガーナ(前列左)に会いに来た。「私(後列中央)もうれしい」

## 与えてくれた度胸、勇気、元気

大橋ちあきさん(56) /新潟県 / 

ホク (LR ♀) ←ジュエル (LR ♀)

盲導犬との生活もかれこれ10年。現在は2代目のパートナー・ホクが、私と一緒に生活をしてきています。

視力が低下してから、主に人による誘導手引きで外出をしていた私にとって、視力が良かった時とほぼ変わらない感覚で歩ける盲導犬歩行は、実に画期的な変化をもたらしてくれました。どんな時でも私にぴったりと寄り添ってくれるパートナーたち。彼らが私に与えてくれた度胸、勇気、元気。そのどれもが、私が社会に溶け込んでいく上でとても大きな力となっています。

それだけではありません。優しさやぬくもりも彼らからの大きな贈り物。「人間と犬がこんなにも深い信頼関係を結ぶことができるのか」。彼らはそんな驚きを日々私に与えてきています。

緊張と感動、そして達成感をその都度積み重ねながら、気がつけば、私自身もずいぶんたくましくなったなと感慨もひと



▲初代パートナー・ジュエルの引退後は「ホク」が相棒

しおです。彼らとの二人三脚を通じて、いろいろな人々とのたくさんの出会いを経験することもできました。

盲導犬との共同生活は、今やそれ自体が私にとって人生の大きな喜びともなっています。いくら感謝の言葉を重ねても重ねきれない、そんな気持ちでいっぱいです。